

「ほめ」に関する心理学的研究の動向

目白大学大学院心理学研究科 澤口 右京
目白大学社会学部 渋谷 昌三

【要 約】

ほめは動機づけに関する研究と対人関係に関する研究に分けられる。動機づけに関する研究では、言語的な報酬としてのほめの方が物質的な報酬よりも内発的動機づけを高めることが指摘されている。またほめの対象となる行動を個人に帰属させた方が、外的要因に帰属させる、説得するよりも効果がある。しかし好ましいほめの内容は成長とともに変化していくため、年齢に応じた適切なほめが必要となってくる。

対人関係におけるほめは、友人や恋人などの関係維持の役割を果たすとされている。ほめの内容は性格、行動、外見などであり文化差はあまりみられない。しかし、性差や相手の立場によって用いられるほめの内容が異なる。ほめには評価という側面があるため、目上の人をほめるときなどには暗示的ほめが用い評価を和らげる。

対人関係におけるほめの役割については、心理学的研究は少なく今後の課題となっている。また関係形成時に価値観の共有をするために用いられるほめの役割も検討する必要があるだろう。

キーワード：ほめ、動機づけ、対人関係

はじめに

ほめるといふ行為は他者の良い点を指摘・評価することであるが、本稿では「ほめ」を動機づけに関する研究と、対人関係に関する研究の2つの枠組みから捉えることを試みる。これまでの心理学的研究において、ほめは動機づけ研究における社会的強化の問題として取り上げられてきた。しかしほめは特定の行動様式の強化には不適當であることや、特定の行動の強化を常に増加させるとは限らないことが指摘されており、単なる社会的強化子ではないという指摘もある(Delin & Roy, 1994)。現在では「児童心理」などの専門誌において子どもをほめるときのポイントなどが定期的に特集されており、例えば福丸(2013)は、ほめる・叱るとともに子どもに伝えたいこと、教えたいことをどう表現するかが重要であるとしている。

一方で対人関係におけるほめに関する研究では、用いられる単語や文法、また文化差についての検討はみられるが、対人関係においてどのような役割を果たすのか、といった心理学的研究はあまりなされてこなかった。これはほめが言語や文化の問題として捉えられてきたためであろう。そこで本稿ではこれまでの心理学における、ほめの動機づけに関する研究と合わせ、対人関係に果たすほめの役割について、心理学の観点から有用であると思われる言語学などの知見を基に、さらなる研究の必要性について検討していきたい。

ところで、日本語の「ほめ」に相当する英語にはpraiseとcomplimentがある。Oxford英英辞典によれば、praiseは「賛同 (approval) や賞賛 (admiration)、人に対する尊敬 (respect) や感謝 (gratitude) の表現」とされる。一方

complimentは「ほめ (praise) や賞賛 (admiration) の丁寧な儀礼的表現」とされる。このことからpraiseとcomplimentは他者の良いところを評価するという点において共通するが、complimentの方がpraiseよりも他者へ失礼にならないように気を配っているという含みがうかがえる。

海外の文献では動機づけに関する研究には主にpraiseが用いられるが、complimentを用いる文献もある。同様に対人関係に関する研究では主にcomplimentが用いられるが、全てではない。対人関係に関する研究においてcomplimentが主に用いられる理由は先述の通り「丁寧に儀礼的表現」という含みがあるためと推測される。いずれにせよ「他者の肯定的な評価」という点で日本語のほめと共通性がみられるため、本稿ではpraiseとcomplimentを「ほめ」としまとめていく。

1 動機づけに関する「ほめ」の研究

これまで心理学において、ほめの研究は動機づけと関連させて検討されてきた。そこでまずは、ほめと動機づけに関する研究をまとめた。

1.1 課題と内発的動機づけ

Anderson, Manoogian, & Reznick, (1976) は4～5歳児を対象に内発的動機づけに関する実験を行った。絵を描いてもらったときに、物質的報酬よりも言語的報酬を与える条件では絵を描く時間が長くなった。このような言語的報酬と物質的報酬の内発的動機づけに及ぼす影響は、幼児だけではなく小学校低学年 (Swann & Pittman, 1977), 高校生 (Harackiewicz, 1979) や大学生 (Deci, 1972) を対象とした実験でも示されている。

これらの研究に対してHarackiewicz, Manderlink, & Sansone (1984) の研究ではゲームの成績に応じて報酬を得た方が内発的動機づけが高まることが示されている。

一方で大宮・松田 (1987) は、できるだけ学校教育に馴染みやすいかたちにし、家での自習量に応じて言語的ほめや報酬を与える実験を行った。その結果、従来の研究と同じく物質的な

報酬は内発的動機づけを低めたが、言語的な報酬は作業量を増加させなかった。これについてはフィードバックを与えたのが次の日だったためではないかとされている。このことはほめのタイミングが重要であることを示唆するものである。

内発的動機づけに関する以上の知見は主に自己知覚理論 (Bem, 1967) と認知的評価理論 (Deci, Cascio & Krusell, 1975) から説明される。自己知覚理論は自分の内的状態を、自分自身の行動を観察することで推測するという理論である。楽しいために作業をしていたときに報酬が加わってしまうと、その報酬のために作業をしていると自ら解釈してしまうと説明される。認知的評価理論は認知的評価が動機づけに影響すると考える。自発的に作業をしていたときに報酬が加わってしまうと、自発的ではなく外から統制されて作業をしていると認知されそれによって内発的動機づけが低下すると説明される。

これまでの研究では内発的動機づけが高まるということは作業量が増加するということであり、その成果には焦点が当てられなかった。Roy, Debra, & Kenneth (1990) はカードならべのような、やる気によって課題の成績が上昇する「努力が必要な課題」と、コントローラーを使ったゲーム課題で、操作技術を獲得するほどに成績が向上する「技術が必要な課題」で、ほめによる成績の変化を比較した。実験の結果、努力が必要な課題ではほめると成績は向上するが、技術が必要な課題では成績は低下することが示された。ほめの対象が課題の成果に対する場合はもちろん、服装や外見であっても成績が低下したところから、課題へのプレッシャーによって成績が低下したのではなく、ほめられたことで自己に意識が向けられ、それが操作技能に干渉したものと考えられる。ほめられたことによって動機づけは高まるが、そのやる気が空回りしている状態といえるだろう。

1.2 ほめの帰属と動機づけ

ほめる際には何をほめるのか (帰属) も重要な要素となってくる。例えばある行動に対して「あなたはいい人です」というほめは「あなたは

いい人なのでそのような行動をとったのでしょう」という人物への帰属となる。Grusec, Kuczynski, Simutis, & Rushton (1978) は課題のゲームで得られたおほじきを子どもに分けたときに、「他人を助けることができる子なので、分けたのでしょ」と自己帰属させる条件と、「私(実験者)が期待していると思ったので、分けたのでしょ。あなたは正しい」と外的帰属させる条件を比較した。結果、自己帰属条件の方が外的帰属条件よりも分けたおほじきの数が多かった。また2週間後もほめの影響は維持されていた。同様にMiller, Brickman, & Bolen (1975) は、算数について能力に帰属させてほめたほうが、算数の勉強をすべきだと説得するよりも自尊感情と成績が上昇した。これらの研究から、対象の個人的な要因と結びつけてほめた方が効果はみられることがうかがえる。個人的な要因の中では、努力よりも能力をほめた方が内発的動機づけが高まった(Koestner, Zuckerman, & Koestner, 1987)という研究もある。確かに能力が評価された方が誇りを感じる(Webster, Duvall, Gaines, & Smith, 2003)ことも示されている。とりわけ他人と比較して成果をほめられた方が誇りを強く感じる事が分かっている。

しかしMueller & Dweck (1998)の研究では能力をほめられた人は、以降に行われる課題の結果を自分の能力に帰属させる傾向が見られた。また失敗体験をした後に人物に対するほめを受けた子どもは、結果や過程をほめられた子どもよりも自己評価が低く、ネガティブな感情を経験し、課題に挑戦したいという程度が低かった(Kamins & Dweck, 1999)。成功時に個人的な要因に関することをほめられた場合はその効果が大きいですが、逆に失敗時は自分の能力のせいだと認知する傾向になってしまい努力不足が認識されない、また本人が成功したと思っていないにも関わらずほめてしまうと、ネガティブな影響を及ぼしてしまう可能性もある。

1.3 効果的ほめの年齢による違い

先に示した通り、ほめる内容は個人的な要因に帰属させたほうが効果があるが、この効果は年齢によって差がある。8歳と5歳を対象にし

たGrusec & Redler (1980)の実験ではほめにより両年齢とも利他的行動は増えたが、5歳児は8歳児よりも利他的行動が少なかった。大人からの評価の意味は年齢によって異なる高崎(2002)ものと思われる。

青木(2005)の調査では、就学前児は手伝いをした時に「すごい・上手」などの賞賛のほめを、1年生は「ありがとう・がんばったね」という愛情・感情のフィードバックをポジティブに受け止めて報告し、実験ではそのようなほめを受けた場合には手伝いの量が増加した。さらに青木(2009a)は小学1年生を3年にわたり追跡調査を行い、2年生になると1年生時には少なかった勉強に関するほめが増え、逆に何かが出来た際にほめられることは学年が上がると減少することを示した。笹川・藤田(1992)の調査では、男子女子ともに小学校低学年まではよくほめられ、よく叱られたが、中学校・高校生では少なくなることが示された。性差はあるがほめられて育ったと報告する学生は自己効力感が高かった。これは自己効力感の高さによって認知に違いがでたという解釈も可能である。しかし親のほめの養育態度は影響力をもち、無視できない要因である(Kelly, Campbell & Campbell, 2000)。

また、ほめられる人の様子を観察しその人の能力を評価するという方法でほめの好みを測る研究も行われている。Meyer, Bachmann, Biermann, Hempelmann, Ploger, & Spiller (1979)は簡単な算数の問題を解いた時、(1)「はい、32が正解です」、(2)「とてもよくできています、うれしいです」と教師からフィードバックを受けたエピソードについて、教師は(1)と(2)どちらの生徒の能力が高いと考えているかを11~12歳児・高校生・成人に評定させた。結果、高校生と成人は(1)を、11~12歳児は(2)を選んだ。同様にBarker & Graham (1987)は4~5歳児は11歳~12歳よりも、ほめられた人の方が能力が高いと評価することを示した。以上のような研究からフィードバックによる認知には年齢差があることが分かる。年齢が低い子どもはほめられる人の方が能力は高いと認識することが分かった。

1.4 効果的ほめに関するその他の要因

Baumeister, Hamilton, & Tice (1985) はある課題の成功予測(「あるテストの成績が良いので、後のテストの成績も良いだろう」という説明)に説得力がある場合は成績が向上するが、逆に説得力がない場合は成績が低迷した。また大矢ら(2011)はトレーニング場面において、これまで否定的フィードバックは不適切なものとされてきたが、建設的で具体的な情報が付加されたなら、肯定的フィードバックと同程度の効果がえられることを示した。よってフィードバックをする際は情報の質が問題となるといえる。

また看護教員が学生の指導時にほめる場合には、関心をよせる行動がほめる支援につながる(高橋, 2010)こと、がん患者の家族ケアにほめを取り入れる試みにおいては、家族の行為に対して心から感じた素直な感謝の気持ちを言葉や態度で表していくことの重要性が指摘されている(青山・高沢・織田, 2002)。加えて、青木(2013)はこれまでのほめと動機づけの関係における研究では、ほめられた後の認知について焦点が当てられてきたが、小学生のインタビュー調査によって、動機づけが高まったことからは、ほめられる以前から意識されていたことを明らかにした。これらの研究は、ほめにあたっては対象との関係を作った上で対象者の様子を観察し、興味や頑張りを把握した上でほめることが効果的であることを示唆するものである。またクラス場面でほめられることははずかしい、緊張するといったネガティブな感情を報告するケースもみられた(青木, 2009b)。このようなケースは少数であり、多くの子どもはほめられることを肯定的に捉えているが、このような子どもがいることにも留意する必要があるだろう。ほめは子どもの動機づけにとって重要であるが、ほめが唯一のものであり、最も重要であると考えてはいけない(Henderlong & Lepper, 2002)という指摘も留意しなければならない。

以上のようにこれまでのほめに関する動機づけの研究は、学校での教育や学習場面を想定した課題などに焦点が当てられてきたといえる。それにともなってほめの対象も個人の能力や努力などに限られ、また幼児や小学生が対象とな

ることが多かった。換言するなら親や教師が児童や生徒のやる気、望ましい行動をほめにより引き出すことが有効か、またその方法について検討してきたといえるだろう。

2 対人関係に関する「ほめ」の研究

これまで記したように、ほめの研究は「学習や教育場面での動機づけ」に焦点が当てられてきたといえる。一方でほめが「対人関係維持の動機づけ」にも有効であると考えられるため、心理学においても有用と考えられる言語や文化に関する研究の知見を述べていきたい。

2.1 ほめの効果

ほめの役割や機能については、肯定的評価を行う評価行為としての機能や社会関係の創造あるいは保持という社会的潤滑油としての役割(熊取谷, 1989)のほか、関係を維持するための社会的戦略 Wolfson (1983) という見方もある。同様にほめ手とほめられ側の仲間意識を高める(Holmes, 1986)という機能は日常生活のなかでも一般的にみられるものである。このようなほめの役割から、ほめはポジティブポライトネス(Brown & Levinson, 1978)の具体的方策一つと考えられる。ポジティブポライトネスは、他人から認められたい、好意を持たれたいという相手の欲求を満たそうとする行為であり、ほめは日常的な親しい人同士のやりとりといえる。

Mendelson & Aboud (2012) では、ほめなどの自己を認めてくれることがらが友人間の満足に影響していることが示唆された。友人関係だけではなく恋愛関係においてもパートナーとの間のほめが関係満足度の影響することが示されている(Doohan & Manusov, 2004)。またTwenge, Baumeister, Tice & Stucke (2001) はエッセイをポジティブに評価した相手に対しては攻撃性が抑制されることを示した。

しかしその人の特性によっては、ほめの効果がうすいという研究もある。例えば自尊感情が低い人は、恋愛関係にあるパートナーからのポジティブな言動に対してためらう傾向にある(Collins & Feeney, 2004)。また、自尊感情が高い人はポジティブ・ネガティブどちらのフィー

ドバックを受けてもあまり影響を受けないのに対し、自尊感情が低い人は特にネガティブなフィードバックを受けたときに恋愛パートナーの評価や自己認識が低下する (Murray, Holmes, MacDonald, & Ellsworth, 1998)。これらの研究に対して、相手からポジティブなフィードバック (友好的で誠実で知的) を受けた人は、自尊感情が高くても低くても相手を肯定的に評価する (Baumgardner, Kaufman & Levy, 1989) という研究もある。Marigold, Holmes, Ross (2007) は自尊感情が低い人でも、恋愛関係にあるパートナーからのほめには意味と重要性があるという前提のもと、その説明を記述させたことでポジティブなものと認識させることに成功した。本当に意味と重要性があるか疑問をもたせた場合、ポジティブなものと認識させることには失敗した。以上のような研究から、自尊感情の程度によってはほめの効果がネガティブになる可能性もあるが、ほめられたことがポジティブな評価であることを確実に認識させることができれば、効果が期待できると思われる。

以上のような対人関係の維持におけるほめの効果の研究は、友達や恋人という関係におけるほめの役割について検討されており、これまでの動機づけ研究における親や教師と児童、生徒といった関係とは異なる。加えて、これまでの動機づけ研究のように、友達や恋人といった関係において何かご褒美をあげるという「賞」はなじまず、またほめの対象が、能力や努力といった学習に関する内容よりも広がると推測される。そのため対人関係におけるほめの研究においては、言語的な研究の知見が有用になると考えられる。

2.2 ほめの内容

どのようなほめが行われているのかについて、林・二宮 (2004) は大学生を対象にアンケートを行い、ほめの内容を「雰囲気・性格ホメ」、「性格・内面ホメ」、「行動ホメ」、「外見ホメ」に分類した。また熊取谷 (1989) は (1) 才能・知識・技術、(2) 容姿・服装・所持品、(3) 努力、(4) 性格、(5) その他に分類している。またHolmes (1986) はほめを外見、能力、所有物、人格・友情、その他と分類してお

り、日本における分類とほぼ同じとなっている。このことからほめの内容は文化によらず共通なのかもしれない。

またほめに用いられる言葉には性差があり、10～20代の男性同士のほめは「優しい」「明るい」「楽しい」「話しやすい」「元気」が多いが、女性同士のほめは「優しい」「かわいい」「楽しい」「明るい」「話しやすい」が多い (林・林, 2005)。男女でおおむね一致するが、やはり「かわいい」というのは女性特有のほめ言葉のようである。これは女性は男性よりも外見をほめる (Holmes, 1988) という知見と一致する。一方で50～60代の男性が用いるほめの上位5項目は「元気」「優しい」「頼りになる」「明るい」「思いやりがある」であり、女性が用いるほめの上位5項目は「優しい」「元気」「頼りになる」「明るい」「思いやりがある」と、おおむね男女で一致し目立った性差はみられない。

ほめの量に関しては、女性同士のほめは男性同士よりも多い (Herbert, 1990; Holmes, 1988) とされ、男性は友情表現の方策としてほめを適当だとは考えないことが指摘されている。年代間を比較した林・林 (2008) の研究では、「優しい」は10～20代、30～40代、50～60代でいずれも多く用いられる。一方で「元気」は10～20代と50～60代が多い。しかし10～20代の「元気」は成長期の勢いがあるという意味であるが、50～60代は病気をせずに健康でいられることを指すものと思われる。また恋人関係においては外見、性格特性、成果が多くほめられる (Doohan & Manusov, 2004)。

これらの研究から対人関係全般で行われる、ほめの内容は能力や努力だけに限られないことがうかがえる。友達や恋人といった対人関係場面におけるほめは、動機づけ研究におけるほめの内容よりも多種多様であり、性差もみとめられることから、ほめの内容によって関係維持に果たす役割も異なると思われる。ゆえにこのような知見をもとに実験や尺度などを作成し、ほめの効果を検討することが有用であると思われる。

2.3 ほめの表現形式

先述の通りほめの内容にはいくつか種類があ

ることが推測させるが、ほめる際の文法からほめ方（どのようにほめるか）の要因も推測できる。

日本語におけるほめの表現形式は1対象物+形容詞, 2形容詞+対象物, 3対象物+好みにまとめられる(熊取谷, 1989)。このまとめに従えば先に紹介した林・二宮(2004)の「雰囲気・性格ホメ」といった分類は対象物となるだろう。それに対して林・林(2005)がまとめた「優しい」「明るい」などは形容詞・好みとなるだろう。よって日本語におけるほめは「何(対象物)をどうほめるか(形容詞・好み)によって表現されるといえる。「優しい」「明るい」は「評価語」であるが, 3の「好み」は個人的嗜好という点で評価にならない。3のようなほめは1と2のように評価語を用いる「明示的なほめ」と区別して「暗示的なほめ」とよばれる(大野, 2003)。暗示的なほめは評価語を使用しないため, 評価という性質を和らげることができ, 人間関係の制約がある場合でも用いやすい。巖(2013)は大人どうしのほめについて, 「偉いですね」という相手への言葉は反感をもたれる危険性があること指摘し, 例えば「見習いたいです」という言葉を使ったほめ方を提案している。「見習いたい」は素直に受け取ると好み, 感想であり, 評価的な側面を和らげる表現となっており, 暗示的なほめといえる。

英語は日本語と文法構造が異なるものの, ほめの表現形式は日本語と同様に動詞と形容詞によって形成される。英語におけるほめでは, 用いられる動詞はlikeとloveが9割を占め(Wolfson, 1983), 形容詞はnice, good, beautiful, pretty, greatが主に用いられる(Wolfson, 1981)。

このような言語における文法の知見から, ほめる際には「何(ほめの内容)」を「どう(ほめの表現形式)」ほめるかという2つの要素が推測される。関係維持のためにどのようにほめるのかという問題も, ほめの内容と合わせて検討する必要があるだろう。

2.4 立場の違いにおけるほめ

ほめが用いられる関係性(立場)についての調査(Holmes, 1986)では, ほめられる側が目

上の場合と目下の場合が少なく, 等しい関係同士(同じ年齢, 立場)のほめが多いことが示されている。またWolfson(1983)は上の立場から下の立場へのほめは能力についてのものが多いこと, 等しい関係やほめ手が受け手よりも立場が低い場合は, 外見や所有物のほめが多くなることを明らかにしている。

しかし, これにも性差が指摘される(Holmes, 1988)。立場が高い女性は立場が高い男性よりもほめられる。これはほめが拒絶される危険性が低いと判断されているためと考えられている。また女性が外見をほめられることは女性の社会的な役割を評価されていることであり, これは女性の立場によって変わることはない(Wolfson, 1984)という指摘もある。一方で立場が高い男性は女性よりもほめられる量が少ない。一般的に同じ立場の女性同士は, 外見のほめを多用するが, 立場が異なると外見のほめの量が少なくなる。男性は立場が下の男性に対しては能力のほめに焦点をあて, 女性に対しては立場が高くとも能力をほめる。

ほめは他者の立場によってその役割が違う可能性が指摘されており, 友達間, 恋人間といった対等な関係の他に先輩と後輩, 上司や部下といった上下関係における違いについても分けて検討する必要があることが示唆される。

2.5 他者評価・他者肯定以外のほめの使用

ほめは後に続くネガティブなことがらを和らげるためにも用いられる(Wolfson, 1983)。例えば「この点は良かった, しかし・・・」というようにほめ+批判の形をとることもある。また解釈のルールを知っている場合は皮肉としても用いられる。これらの使用法は日本においても同様である。ほめの運用として熊取谷(1989)は1後続する反論, 批判などを和らげるために用いる, 2会話開始の表現として用いる, 例えば「うわあーかっこいい」など, 3皮肉として用いる, 4後続する依頼を成功させるために「おだて」として用いる, の4つにまとめている。

以上の指摘から, 言葉の内容はほめであっても, 発言者の意図や目的によって, ほめとは異なる役割を果たす場合があることがうかがえ

る。このような場合については、ほめの研究にあたって区別する必要があるだろう。

2.6 ほめのネガティブな側面

ほめは基本的には肯定的なものであるが、成果についての評価に懸念を引き起こす可能性がある (Kanouse, Gumpert, & Gumpert, 1981)。またほめは、ほめ手の誠実さ、動機、認識に加え、ほめられ手のだまされやすさに対する疑問を生じ得る。さらに、ほめに対する適切な対処を試す場になる。そしてほめられたことがらに関する自己認知の検索をもたらす、ほめと矛盾している情報が見つければ、自己批判をもたらす (Schlenker & Leary, 1985)。さらに Leary & Meadows, (1991) の研究からほめられることで、評価懸念や自己批判が生じる可能性があり、ほめに対する対応によっては恥をかくおそれがあることがうかがえる。

さらに Flora, Segrin, & Chris (2000) の研究では、結婚の不满とほめが夫婦の感情と行動に及ぼす影響について、ほめた方が不満を言った時よりもポジティブな感情は生じたが、ポジティブな感情は関係の満足感と関係しなかった。一方でネガティブな感情は関係の満足感と負の関係があった。これは相手からのポジティブな感情の表現は、ネガティブな感情の表現よりも認知しにくい (Gaelick, Bodenhausen, & Wyer, 1985) ことが原因の一つと考えられる。恋愛関係にある男女においては、女性の方が男性よりもほめに気づきやすい (Doohan & Manusov, 2004)。そのため女性は男性をほめているにも関わらず、男性にそれが伝わらないということが生じ得る。このように関係の維持に果たす役割がどちらか一方に偏ることは、関係満足度の低下を引き起こす (Fletcher, Fincham, Cramer, & Heron, 1987) 可能性がある。

ほめが伝わらない他の要因としてスキーマに関するものがある。寄付を募るにあたり、相手に対して慈悲深いとほめた群からは多くの寄付が得られた。これは他者によってラベル付けをされると、それに基づいて自己像を形成し、その通りにふるまおうとするためである。しかしほめの内容が自己像と一致しなければ、その情報は処理されずほめによって影響されることは

ないと考えられる。(Kraut, 1973; Markus, 1977; Markus & Smith, 1981)。

確かにほめは人間関係を円滑にするために有用であるかもしれないが、動機づけの研究と同様に方策の一つである。ほめが過剰になって大げさなお世辞をいわれた人は、何か隠された動機があるのではないかと疑いをいだく。たとえ長所であっても、あまりほめられると困惑してしまう (Buss, 1991)。

以上のような研究から、ほめは基本的に関係維持に役割を果たすものと考えられるがしかし、逆効果になる可能性も示唆される。関係維持のための効果はもちろんであるが、ほめが失敗する場合にはどのような特徴がみられるかも合わせて研究する必要があるだろう

3 考察

従来、ほめに関する心理学的研究は動機づけとの関係について検討されてきた。一方でほめと対人関係との関係についての心理学的研究は少ない現状にある。心理学においては言語行動に焦点があてられることが少なかったという理由に加え、ほめることは言語行動であることから、ほめに使われる言葉や文法、言語行動の文化差といった言語の問題に焦点が当てられてきたためだろう。今後の研究に必要とされる観点として6点を指摘したい。

第1に、ほめは関係を維持する役割を果たすとされているが、その具体的検討は少なく検討する必要があるだろう。すなわち、「対人関係維持の動機づけ」について研究していく必要性がある。従来のはめと動機づけの研究は「学習や教育場面での動機づけ」に関するものであり、対人場面でどのようなほめが行われており、関係維持に役立っているのかを検討することは、対人関係における言語行動の役割を示す知見になるものと思われる。

第2に、これまでの「学習や教育場面での動機づけ」の研究では、ほめの内容が能力や努力に限られていた。しかしほめの内容はより多種多様である。友達同士で服が素敵だと言われることによって、服装に限らずきれいだであるために努力がなされるかもしれない。これまでの能

力や努力以外の、外見や所有物に関する動機づけを検討することで新しい知見が得られるかもしれない。

第3に、ほめの役割についてはこれまで関係維持が指摘されてきた。しかしほめには評価や価値観が含まれると考えることができ、その情報は将来の対人相互作用の戦略を示すという役割(Howard, Blumstein, & Schwartz, 1986)も果たすと考えられる。例えば服が素敵だとほめることはその服を素敵だと思う価値観を示すことになり、服のセンスの共通性を示すことになる。関係形成においては、お互いの価値観の類似性を通して相互作用を持つ相手が限定されてくる(Kerckhoff & Davis, 1962)ことから、ほめによって価値観の共有を行い親密になっていくということも考えられるだろう。このような価値観の共有は関係初期においてみられ、関係が形成されて安定するとほめが減少すると考えられる。すなわち親友や夫婦では関係性を維持するためにほめが必要なく、お互いをほめる頻度が少なくなるかもしれない。

第4に、年齢におけるほめの変化は「学習や教育場面での動機づけ」に関する研究で行われてきたが、対人関係ではその検討はなされていない。成人はもちろん、大学生でも対人間のほめはみられるようであるが、友達同士のほめがどの位の年齢から用いられるのかを検討することは対人コミュニケーションを研究する上で役に立つものと思われる。

第5に、成人においても人によって関係維持の方策としてほめを用いる程度に差があると推測される。そのような違いはなぜ生じるのか、例えば性差や個人特性の要因について、さらにほめ方(明示的ほめや暗示的ほめ)の使用頻度の違いなどを検討することは関係形成の個人差について新たな知見を提供するものと思われる。また関係維持の方策はほめだけではないはずであるので、その他の方策とほめの関係についても検討することは意義があるだろう。

第6に、「学習や教育場面での動機づけ」に関するこれまでの研究では子どもの意欲や特性を向上させるには、親・教師がどのように振る舞えば良いかに焦点を当ててきたといえる。しかし、ほめは関係維持の役割をはたすことが指摘

されていることから、ほめ手である親や教師が意図しなくとも、子どもとの関係に影響を与えていることは否定出来ない。ほめ手とほめられ手の関係性も重要だという指摘(青山ら, 2002; 高橋, 2010)から、親・教師と子どもとの関係におけるほめの効果の研究は有用な知見になるものと思われる。

以上のように「ほめ」という言語行動に焦点を当てることによって、動機付け研究はもとより、対人関係の維持と形成に関する研究についても新たな知見が得られるものと推測される。

【引用文献】

- Anderson, R., Manoogian, S. T., & Reznick, J. S. (1976). The undermining and enhancing of intrinsic motivation in preschool children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 915-922.
- 青木直子 (2005). 就学前後の子どもの「ほめ」の好みが動機づけに与える影響, 発達心理学研究 16, 237-246.
- 青木直子 (2009a). 子どもの報告するほめられたエピソード・ほめられ方の発達的变化—小学校入学後3年間の縦断調査による検討—, 藤女子大学紀要 第II部, 46, 53-59.
- 青木直子 (2009b). 小学校1年生のほめられることによる感情反応—教師と一対一の場合とクラスメイトがいる場合の比較—, 発達心理学研究, 20 (2), 155-164.
- 青木直子 (2013). 小学校1~3年生のほめられる前後の認知と動機づけの関連, 藤女子大学人間生活学部紀要, 50, 65-71.
- 青山絹代・高沢 絹子・織田 史江 (2002). 終末期がん患者の家族ケアに“ほめる”をとり入れた試み, 日本看護学会論文集 2 成人看護, 33, 129-131.
- Barker, G. P., & Graham, S. (1987). Developmental study of praise and blame as attributional cues. *Journal of Educational Psychology*, 79, 62-66.
- Baumeister, R. F., Hamilton, J.C., & Tice, D.M. (1985). Public versus private expectancy of success: Confidence booster or Performance pressure? *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1447-1457.
- Baumgardner, A. H., Kaufman, C. M. & Levy, P. E. (1989). Regulating affect interpersonally: When low esteem leads to greater enhancement.

- Journal of Personality and Social Psychology*, 56 (6), 907-921.
- Bem, D. J. (1967). Self-Perception: An alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, 74, 183-200.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978). *Politeness Some universal in language usage*. Cambridge University Press. (Brown, P. & Levinson, S. C. 田中典子(監訳) (2011). ポライトネス: 言語使用における, ある普遍現象 研究社)
- Buss, A. H. (1986). *Social Behavior and Personality Lawrence Erlbaum Associates*. Lawrence Erlbaum Associates. (Buss, A. H. 大淵憲一(監訳) (1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Collins, N. L. & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment shape perceptions of social support: Evidence from experimental and observational studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 363-383.
- Deci, E. L. (1972). Intrinsic motivation, extrinsic reinforcement, and inequity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 22, 113-120.
- Deci, E. L., Cascio, W. F., & Krusell, J. (1975). Cognitive evaluation theory and some comments on the Calder and Staw critique. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 81-85.
- Delin, C. R. & Baumeister, R. F. (1994). Prise: More Than Just Social Reinforcement *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 24 (3), 219-241.
- Dooohan, E. M., Manusov, V. (2004). The Communication of Compliments in Romantic Relationships: An Investigation of Relational Satisfaction and Sex Differences and Similarities in Compliment Behavior. *Western Journal of Communication*, 68(2), 170-194.
- Fletcher, G. J., Fincham, F. D., Cramer, L., Heron, N. (1987). The role of attributions in the development of dating relationship. *The Journal of Personality and Social Psychology*, 53(3), 481-489.
- Flora, J. Segrin, C. (2000). Affect and behavioral involvement in spousal complaints and compliments. *Journal of Family Psychology*, 14 (4), 641-657.
- Gaelick, L., Bodenhausen, G. V., & Wyer, R. S. (1985). Emotional communication in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1246-1265.
- Grusec, J. E. & Redler, E. (1980). Attribution, reinforcement and altruism: A developmental analysis. *Developmental Psychology*, 16, 525-534.
- Grusec, J.E., Kuczynski, L. R., Simutis, Z.M., & Rushton, J.P., (1978). Modelling, direct instruction, and attributions: Effects on altruism. *Developmental Psychology*, 14, 51-57.
- Harackiewicz, J. M. (1979). The effects of reward contingency and performance feedback on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1352-1363.
- Harackiewicz, J. M., Manderlink, G., & Sansone, C. (1984). Rewarding pinball wizardry: The effects of evaluation on intrinsic interest. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 287-300.
- 林 宇萍・林 伸一 (2005). 「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度 (2) : 10代・20代の同性・異性間の差異, 山口国文, 28, 42-54.
- Henderlong, J. & Lepper, M. R. (2002). The effects of praise on children's intrinsic motivation: A review and synthesis. *Psychological Bulletin*, 128(5), 774-795.
- 林 宇萍・林 伸一 (2008). 「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度(4) 50-60代の同性・異性間の差異及び他の世代との比較, 山口国文, 31, 54-38.
- 林 伸一・二宮 喜代子 (2004). 「ほめる」使用頻度と「ほめられる」好感度: 女子学生のアンケート調査にみる心理言語学, 山口国文, 27, 88-96.
- Herbert, R. K. (1990). Sex-based differences in compliment behavior. *Language in Society*, 19 (2), 201-224.
- Holmes, J. (1986). Compliments and compliment response in New Zealand English. *Anthropological Linguistics*, 28, 485-508.
- Holmes, J. (1988). Playing compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of Pragmatics*, 12, 445-465.
- 巖岩奈々 (2013). 自分をほめる, 児童心理, 67 (4), 32-38.
- Howard, J.A., Blumstein, P. & Schwartz, P. (1986). Sex, Power, and Influence Tactics in Intimate Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 102-109.

- 福丸由佳 (2013). 「ほめる・叱る」のバランス, 児童心理学, 67 (4), 45-50.
- John, S (2003). Oxford Dictionary of ENGLISH. Oxford University Press.
- Kamins, M. L., & Dweck, C. S. (1999). Person versus process praise and criticism: Implication for contingent self-worth and coping. *Developmental Psychology*, 35, 835-847.
- Kanouse, D. E., Gumpert, P., & Canavan-Gumpert, D. (1981). The semantics of praise. In J. H. Harvey, W. Ickes, & R. E. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research*; Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp. 120-147.
- Kelly, S. A., Brownell, C. A., & Campbell, S. B. (2000). Mastery motivation and self-evaluative affection toddlers : Longitudinal relations with maternal behavior. *Child Development*, 71, 1061-1071.
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E., (1962). Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- Koestner, R., Zuckerman, M., & Koestner, J. (1987). Praise, involvement, and intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 383-390.
- Kraut, R.E. (1973). Effect of social labeling on giving to charity. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 551-562.
- 熊取谷哲夫 (1989). 日本語における誉めの表現形式と談話, 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究, 2, 97-108.
- Leary, M. R. & Meadows, S. (1991). Predictors, elicitors, and concomitants of social blushing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60 (2), 254-262.
- Marigold, D. C., Holmes, J. G., Ross, M. (2007). More than words: Reframing compliments from romantic partners fosters security in low self-esteem individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92 (2), 232-248.
- Markus H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*. 35 (2), 63-78.
- Markus, H. & Smith, J. (1981). The influence of self-schemata on the perception of others. In Cantor, N. & Kihlstrom, J.F. (Eds) *Personality, cognition and social interaction*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum & Assoc., pp.233-262.
- Mendelson, M. J. & Aboud, F.. (2012). McGill Friendship Questionnaire—Respondent's affection (MFQ-RA) <<http://www.midss.ie/content/mcgill-friendship-questionnaire---respondents-affection-mfq-ra>> (2012年9月24日)
- Meyer, W., Bachmann, M., Biermann, U., Hempelmann, M., Ploger, F. & Spiller, H. (1979). The informational value of evaluative behavior: Influences of praise and blame on perceptions of ability. *Journal of Educational Psychology*, 71, 259-268.
- Miller, R. L., Brickman, P. & Bolen, D. (1975). Attribution versus Persuasion as a means for modifying behavior. *Journal of Personality and Social psychology*, 31, 430-441.
- Mueller, C. M., & Dweck, C. S. (1998). Praise for intelligence can undermine children's motivation and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 33-52.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., MacDonald, G., & Ellsworth, P. C. (1998). Through the looking glass darkly? When self-doubts turn into relationship insecurities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1459-1480.
- 大野敬代 (2003). 人間関係からみた「ほめ」とその工夫について, 早稲田大学大学院教育学研究紀要別冊, 10 (2), 337-346.
- 大宮俊恵・松田文子 (1987). 児童の内発的動機づけに及ぼす教師の外的強化の効果 教育心理学研究, 35 (1), 1-8.
- 大矢 優・中谷陽輔・杉若弘子 (2011). アサーション・トレーニングにおける肯定的フィードバックと否定的フィードバックの役割, 心理臨床科学, 1 (1), 25-33.
- Roy F. B., Debra G. H., and Kenneth J. C. (1990). Negative Effects of Praise on Skilled Performance. *Basic and applied social psychology*, 11 (2), 131-148.
- 笹川宏樹・藤田正 (1992). 親の養育態度と自己効力感及び自己統制感の関係, 奈良教育大学教育研究所紀要, 28, 81-89.
- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1985). Social anxiety and communication about the self. *Journal of Language and Social Psychology*, 4, 171-192.
- Swann, W. B. J. & Pittman, T. S. (1977). Initiating

- play activity of children: The moderating influence of Verbal cues on intrinsic motivation. *Child Development*, 48, 1128-1132.
- 高崎文子 (2002). 乳幼児期の達成動機付け—社会的承認の影響について—ソーシャルモチベーション研究, 1, 21-30.
- 高橋昌子 (2010). 看護教員が臨地実習での学生の行動に対して肯定的に表現する「ほめる行動」に及ぼす影響, 看護教育研究集録 Reports of nursing research, (36), 56-63.
- Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T.S. (2001) If You Can't Join Them, Beat Them: Effects of Social Exclusion on Aggressive Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81 (6). 1058-1069.
- Webster, J M., Duvall, J., Gaines, L. M., Smith, R. H. (2003) The roles of praise and social comparison information in the experiences of pride. *The Journal of Social Psychology*, 143 (2), 209-232.
- Wolfson, N. (1981). Compliments in cross-cultural perspective. *TESOL Quarterly*, 15, 117-124.
- Wolfson, N. (1983). An empirically based analysis of complimenting in American English. In Wolfson, N. & Judd, E. (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House. pp.82-95.
- Wolfson, N.(1984). Pretty is as pretty does: A speech act view of sex roles. *Applied Linguistics*, 5, 236-244.

—2013年9.25受稿, 2013年11.15受理—

A review of psychological studies on praise and compliment

Ukyo Sawaguchi Mejiro University, Graduate School of Psychology
Shozo Shibuya Mejiro University, Faculty of Studies on Contemporary Society

Mejiro Journal of Psychology, 2014 vol.10

[Abstract]

The praise and compliment study is divided into the motivational perspective and interpersonal relationship perspective. In the motivational study, verbal praise raises intrinsic motivation than the reward. And the attribute of behavior to personal raise intrinsic motivation than external attribution or persuasion. But the desirable praise changes by development of child, it is necessary to use appropriate praise depending on children's age.

In the study of interpersonal relationships, the compliment functions maintain rapport between friends or partners. Content of compliment are personality, behavior, appearance and others, there are few culture differences. But compliment content varies according to sex differences and the difference of the position. When compliment a superior person, it is used suggestive compliment. This is because an evaluation is included to compliment, but suggestive compliment moderate an evaluation.

The study of compliment function in the interpersonal relationships has few psychological studies, and a further study is expected. In addition, it will be necessary to examine the compliment function to share sense of values when a person builds the relationship.

keywords : praise, compliment, motivation, relationship

